
コーヒー

yolu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コーヒー

【コード】

N9439Z

【作者名】

youu

【あらすじ】

『私たち、合わないね。』

出会えたことは嬉しいけど、

もう、

いじめん、

『さよなら』

さよなら。

たった四文字で描かれた恋の末路は、
あまりに素っ気無く、冬の曇り空のように、色褪せた風景だった

『私たち、合わないね。』

出会えたことは嬉しいけど、

もう、

ごめん、

さよなら
『』

さよなら。

たった四文字で描かれた恋の末路は、あまりに素っ気無く、冬の曇り空のように、色褪せた風景だった

茂はホットコーヒーをテイクアウトし、公園のベンチへと腰を下ろした。

日曜でもない今は誰もおらず、閑散としている。

冬の色も濃くなってきたために、落ち葉があたりに敷き詰められ、木々の姿が痛々しく見える。

いや、自分の心が痛いからか

熱いコーヒーをすすり、茂は鼻で笑った。

熱さに舌が痺れるが、コーヒーの苦味がすべて消してくれる気がして、またすすった。

熱いままのコーヒーだが、冷え始めた手の中で徐々に熱を冷ましていく。

まるで彼女との恋のようで

気づいたときには、もう温くなったコーヒーのように、何も感じない、ただの水のように、味も香りもなくなって、この曇り空と同じように、灰色に染められた思い出になっただろう。

自分はそんなことにも気づかないまま、コーヒーは熱いものだと思

い込んでいたのだ。
飲み込んで初めて、熱くなかったんだと気づく愚か者なのだ。

「バカみてえ」

空が滲む。

そんなに好きだったんだ。

となりにいないのがこれほど、

これほど、辛いのか。

あの感触も、あの香りも、すべて消えてしまつのはいつなのだろう。

明日でも、息を吐いた今からでも、この白い息が消える間に、すべて忘れられないだろうか。

ふいと白い息が目の前に浮かぶ。

すぐに散った息の欠片は、なにも消してはくれない。

「コーヒー、冷めただろ？」

缶が頬に触れた。

あまりのことに茂が慌てながら振り返ると、友人の康史がいる。

「ビビるだろ、康史」

「いやあ、茂さんがフリーになったと聞いたので、祝福してあげないと思って思いました、馳せ参じてみました」

康史はニヤニヤしたまま、缶のコーヒーをすすする。

「うっせえな。」

お前のほうこそ、この前の合コンの、あれ、のぞみちゃんだけ、どうなったんだよ」

「んなもん、なんも進展しないに決まってるでしょ」

「なんでだよ？」

「そんなもんなの。女心はわかりません」

「そ。だよなあ……」

二人で見上げた空は晴れてもなく、ただの曇りで、薄明るい昼間

と雑踏から離れた時間は、そこだけ時間が止まっているような、そんな気さえする。

空気が頬を撫でていくが、彼女の言葉のように鋭く痛む。

「冬になるのに、手をつなぐ相手がいないってのは、辛いですな」
康史がぼやくと、再び茂は鼻で笑う。

「お前もだろうが」

「俺はいいのよ。別に、ひとりで」

「なんだよ、それ」

「なんだろね。面倒なんじゃね？」

面倒。茂にはその二文字がわからない。

彼女といることが面倒などと考えたことがないからだ。

毎日彼女に会える学校が楽しみだったし、いつもの慣れた道も彼女といっしょなら、特別なものになった。
当たり前前なのが特別なことになるのだ。

それなのに、ここの男は面倒だと？

「茂、なんだよその顔？」

腑に落ちないような顔して「

「だって彼女といったら楽しいだろ？」

違う？」

「俺、気を遣うタイプで他人とっていうか、なんだろ、特に女子に
関しては、ホントに気を遣うっていうか。」

まあ、めんどくさい」

「確かにお前、気が利くよな」

「うん」当たり前前のように返事をした康史に茂は小突いてみる。

雲の切れ間から覗いた秋の空は薄い水色。

何もかもを飲み込むように澄んだ色に見える。

この澱んだ気持ちも飲み込んでくれないだろうか。

「なあ、やつぱ、俺が悪かったのかな……」

白い息と吐き出された言葉は弱気な言葉だ。

康史はすぐには答えずに、落ちた枯葉を数えるように視線を泳が

した。

「わかんね。」

これはどっちが悪いなんてあるの？」

「俺が構わなかったからとか、伝え方がわるかったとか、優しくなかったとか、いろいろあるし、それに」流れる空気が茂の言葉を強めていく。気温とは逆に熱ににじむ言葉に康史は頷いて見せるが、

「それがわかって、どうかなるの？」

茂の言葉は止まった。

確かにそうだ。

そうなのだ。

今から彼女にメールを出して、会えるわけでもなく、その理由を聞いてよりが戻せるわけでもない。

だが、理由が欲しい。

こうなった理由が欲しいのだ。

『合わなかった。』

そんな言葉で片付けられるなんて

「蔑的にさ、理由がほしいの？」

それとも、悔しいの？」

フラれたことが「

どうしてこいつはこんなにも核心を突いてくるのだろう。」

どちらともいえない感情の中で、冷たいコーヒーをすすり、苦味の残る舌が伝えた言葉は、

「悔しいのかもしれない」

どんなに思っていたとしても、それは独りよがりな気持ちなだけで、彼女の結果に不満なのは、きっと自分が『ここまで思っていたのに』という奢った気持ちがあるからだ。

どこまでも自分の気持ちだけで、答えを求め、応えを求めているのだ。

風が落ち葉を巻き上げた。

舞った木の葉は白い空で泳いでいる。

あまりに自由なダンスに目が留まる。

そのダンスは今のこの時間を楽しむように揺れて舞って揺れて落ちて、また空を泳ぎ、まるでとなりにいるこの男のようだ。

自分の好きなことをして、自分の感じたままに言葉を放ち、そして今は楽しそうに落ち葉を拾って笑って騒いでいる。

「なあ茂、ぶつちやけ聞けどさ、

元カノのどこが好きだったの？」

「笑顔」

「笑顔？」

「明るく笑うんだ。」

どんなことにも明るく笑って返事して。

毎日が温かくなりそうで、

それが好きで告白した」

「だけど付き合ってみたら、ちょー真逆だった的な？」

「真逆まではいかないけど、」茂は残り少なくなったコーヒーをすすった。冷め切ったコーヒーは、妙に酸っぱい。

飲めたもんじゃらないなど、康史が差し入れしてきたコーヒーに並べて置く。

ベンチ前の広いスペースで様々な落ち葉を拾い上げて眺めていた康史が急に顔を上げた。

「それってさ逆に言えば、周りに気遣いできる優しい元カノだったってことでしょ」

「そうなんだけどさ」

本当にそうだ。

だけど、期待していた彼女じゃなかった。

いつも明るい彼女は造っていた彼女だった。

それでもいいと思っていたけど、寂しくも感じていた。急に変わったわけではなかったけど、素を感じるたびに、距離を感じたのは、言えるかもしれない。

だけどそれは時間が埋めるものだと思っていた。

いや、これはただの言い訳だ

康史は銀杏の葉を一枚広い、にやにやししながら近づいてきた。

「この銀杏、色もキレイで、形もよくね？」

「どのあたりがいい感じなの？」

茂にしてみれば、どれも同じに見える。

「この輪郭と、澄み切った黄色」

「そう？」

隣に再び腰を下ろして、銀杏の葉をくるくる回しながら、康史は続けた。

「もしかしたら、元カノ、お前の期待に応えられなくて、離れたのかもな」

「ん？」

「お前の前では、できれば素でいたいじゃん。」

「だけど、それをしたらお前が違和感？　みたいなさ、感じちゃうだろ？」

「やっぱり、俺が悪いな」

茂は頭を抱えこんだ。

どんな彼女でも好きだったと今更気づいた。

そう、今更なのだ。

傍にいたときは、彼女に癒されたくて、癒されたくてたまらなかつ

た。

ただ、甘えていただけだ。

彼女だって癒されたかったのに。

勝手な想像で彼女をしばり、『俺の彼女』を演じさせていたのだろつ。

だから離れたのだ。

彼女の言葉は優しい別れの言葉で、そして、核心を突いた言葉だった。

『合わなかった』

「あいつに謝りたい……」

俺、ちよう恥ずかしい。

どんなんでも、あいつのこと好きだったのに」

「謝らなくてもいいよ」

声が違う。

慌てて顔を上げると、そこには、ついさっき別れを切り出した元彼女がいる。

「康史さんに呼ばれて来たんだ」

空気が止まる。

それでも彼女は続けた。

「私の気持ち、ちよつとわかった？」

大きく頷き、茂がうん、ともう一度繰り返したとき、頭をポンと彼女が叩く。

「気づくの遅いね」

彼女が言っていると、茂はすかさず言った。

「もう一度、やり直したい。」

俺、努力するから」

彼女はすました顔をしながらも、白い息を滲ませ、

「なら、もう少し、傍にいてあげるか」

優しい笑顔だった。

彼女から差し出されたのは、康史からもらったコーヒーだ。

「私も康史さんにコーヒーもらったんだ。」

こういうデートもいいね。

冷たいコーヒー飲みながらって」

茂は缶を受け取り、プルタブを開けて、一口飲み込んだが、ずっと熱い缶コーヒーだと思い込んでいた。内側から冷される寒気に一瞬身震いするが、

「たまに、こういうデート、しょっか」

茂は再び飲み、缶を包んで手に持った。

両手の温度が缶へと吸い取られていくが、いつか缶の温度は手と同じ温度になるだろう。

熱いモノを維持することは、なんにでもエネルギーがかかるものだ。だが冷めたものならいつでも温められる。

時間がどんなにかかっても。

メールの着信音が響いた。

『茂殿

この度の件にてかなりの労力が掛かり候、故に、焼肉を所望する

康史くんより』

「康史が焼肉食いたって」

「私、康史さんに合いそうな子知ってたよね。設定しようか？
初めて彼女の心からの笑顔を見た気がする。」

これからどんどん新しい彼女の一面を知ることができることに、
とても楽しみになる。」

思わず、

「あいつの彼女ってどんな彼女だろうな」

小さく呟き、康史に似合う彼女像を想像しながらも、携帯で焼肉
店を探し始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9439z/>

コーヒー

2011年12月29日15時49分発行